時代読み解き命を守る

教育に新聞をどのように活用できるかを考える第30回NIE全国大会（日本新聞協会主催、神戸新聞社など主管）が7月31日～8月1日、神戸市で開かれた。スローガンは「時代を読み解き、いのちを守るNIE」で、約1800人の教育・新聞関係者が集まった。

NIE全国大会・神戸

1日目の全体会では、大会実行委員会の竹内弘明委員長が基調提案として、真偽不確かな情報が社会にあふれ、インターネット上の悪口や中傷で人の命が奪われることもあると指摘。「正確な情報を取捨選択し活用する能力を身に付け、インターネットとうまく付き合うために、新聞やNIE活動は有効だ」と述べた。

パネル討議には、日本新聞協会NIEアドバイザーで兵庫県西宮市の浜脇中の渋谷仁崇（ひとたか）主幹教諭らが参加した。高校生だった1995年、阪神大震災で被災した渋谷さんは「伝える側にとって一番大事なことは、情報を正確に早く伝えることだ」と強調。その上で、記録だけでなく戦争や大災害を体験した人たちの記憶を次の世代に伝承するのは、地元の新聞の役目だと締めくくった。

記念講演では、作家の小川洋子さんが登壇し、交流サイト（SNS）の画面に表示される言葉は、相手が発した言葉の本当の意味を伝えてくれているとは限らないと述べた。一方で、「情報は受け取った側の人間性や人格が問われる。自分に関係ないとすぐに切り捨てるのではなく、受け取る側の心の余裕、包容力をぜひ若い人に育ててほしい」と訴え、「その力を養うには文学を勧めたい」と力を込めた。

2日目は公開授業や実践発表が行われ、熱心に意見が交わされた。同級生同士が、自分が選んでスクラップした記事の意見交換をした結果、それぞれの興味や関心の対象が広がった、とする報告もあった。

来年の全国大会は広島市で開かれる予定。

教育に新聞を

第30回NIE全国大会で開かれたパネル討議

情報の真偽 確かめる力に

震災復興 報道でたどる　「阪神・淡路」から30年の歩み

NIE全国大会の会場では、発生から30年が経過した阪神・淡路大震災のパネル展示コーナーが設けられた。神戸新聞社の報道記録を基に、発災当時の様子や復興の歩みを振り返った。

「震災ダイアリー　―365日の記憶―」は、震災発生当日から1年間の地域の歩みを写真とともにカレンダー形式でたどる展示で、多くの来場者が足を止めて見入っていた。

企業・新聞社ブースコーナーでは、岩手日報社が東日本大震災の広告企画による「最後だとわかっていたなら教育プログラム」を紹介した。

大会2日目の会場でも、ポスター発表に併せて「防災とNIE」コーナーを設置。全国各地の学校や新聞社など71団体によるNIE実践例紹介のほか、「最後だとわかっていたなら教育プログラム」ポスターや児童生徒が作製したポスターが並べられた。

神戸新聞社の報道記録を基に阪神・淡路大震災30年を振り返ったパネル展

公開授業・浜脇中（兵庫県西宮市）

記事スクラップ 意見交換

兵庫県西宮市の浜脇中は、全校生徒約800人が週に1回、新聞記事をスクラップする「NIEノート」の作成に取り組んでいる。公開授業では3年生約30人がグループに分かれ、NIEノート交流を展開。生徒それぞれが切り抜いた記事について発表し、意見を述べ合った。

ノートには自分が興味を持った記事を貼り付けるほか、意見や提案なども書き込む。東井日葵さんは、大阪・関西万博のフードコートで有料チケットを買わなければ着席できず、立ち食いが目立っている―という記事に注目。「掃除やごみ処理など衛生面に課題がある」とし、解決策としてごみ袋やウエットティッシュを詰めたキットの配布を提案した。

NIEノートをきっかけにニュースに関心を持つようになったという東井さん。「見出しを読んで興味を引く記事を探し、どうしたらもっと世の中が良くなるのか考えながら読んでいる。意見を交換することで自分では思いもよらないアイディアに気付かされる」と意欲的に取り組む。

授業後半には、当日配られた新聞から連日の猛暑に関する記事を探し、自身の意見を考えた。生徒たちは見出しや記事に線を引きながら、コメの価格上昇や水筒の斜め掛けによる転倒事故の発生、救急車の出動回数増加といったニュースを抜き出した。

渋谷仁崇教諭は「社会はいろいろなことが全部つながっている。正しい情報を集めて正しく行動することが必要」と呼びかけた。

同校のNIE活動は、国連の持続可能な開発目標（SDGs）の「住み続けられるまちづくりを」をテーマに主権者教育の一環として行っている。「生徒には主体的に、自分事として西宮を愛していってほしい」と渋谷教諭は願いを語る。

（プラス日刊紙事務局・角田元）

NIEノートを見せ合い、課題や解決策などについて意見を交わす浜脇中の生徒

本県NIEアドバイザー 実践指定校教員の大会報告

第30回NIE全国大会に参加した本県の日本新聞協会NIEアドバイザーや実践指定校の教員が公開授業、実践発表について報告する。

盛岡・下橋中　教諭　川崎美希子さん（NIEアドバイザー）

幼小中高一貫校において「中学3年生と小学6年生が伝え合う原爆と平和」というテーマで、NIEの4分野である①新聞活用②新聞製作③新聞機能④新聞閲読―の学習を網羅した「伝える力」を育む実践事例を参観した。自分に落とし込んだものこそが人に伝わり、正確な情報で民意をつくることが平和な社会につながることを再認識した。

盛岡・上田中　講師　及川　敏彦さん（NIEアドバイザー）

浜脇中の実践は、SDGs目標11を目指し、企業や地域と連携しながら未来のまちづくりを提案していくものだ。似たような過去の実践と違うのは、生徒の提案の裏付けに新聞資料を用いて確かな根拠としていること。何を根拠に思考し判断したのか、が重要とされる時代だからこそ中学生には新聞が必要なのだと改めて感じさせられた。

釜石・甲子中（NIE実践指定校）　教諭　川村　吉さん

小中学校の学びの連続性を生かした実践に取り組む兵庫県姫路市の豊富小中の発表を聞いた。新聞から始まる継続型探究学習。小学校低学年から遊びを通じて新聞を身近なものにし、中学校では同市を取り上げた記事を12のテーマに分類、生徒自身が現地調査を含めた探究活動を行う。新聞を通した主体的な学びの広がり、可能性について考えさせられた。

遠野高（NIE実践指定校）　教諭　大森　禎香さん

新聞記事にある社会問題をSDGsと関連付け、新聞ポスターを作製する「総合的な探究の時間」の実践発表を聞いた。生徒は社会課題を自らの生き方と結びつけ、社会への関心を深めていた。新聞の活用は情報収集だけでなく、要約力や興味を引くまとめ方の工夫にもつながり、「新聞は自分の興味を新発見できる」との感想が印象に残った。